

# キャリア教育授業の学習評価方法最適化に向けたテキスト分析の活用

鈴木 学

福岡大学 教育開発支援機構

manabu-szk@fukuoka-u.ac.jp

## Utilizing Text Analysis to Optimize Learning Evaluation Methods for Career Education Classes

Manabu Suzuki

Institute for Development and Support of Higher Education, Fukuoka Univ.

### 概要

大学教育の正課内で実施されるキャリア教育授業は、カリキュラム上の位置付けや授業設計・評価のあり方について各大学の裁量に委ねられている現状にある。特に、キャリア教育授業はその他の授業に比べて授業の到達目標に合致した学習評価方法になっているかどうか検討の余地がある。そこで本研究では、受講生の学習成果物であるレポートについてテキスト分析を行い、成績区分別の傾向を明らかにした。この結果、成績区分に関わらず受講生がレポートで用いるキーワードには高い共通性が認められた。一方、ワードネットワーク上では主要ワードの周辺領域ワードにおいて顕著な違いが確認され、これが成績に影響していることが示唆された。

## 1 はじめに

### 1.1 課題背景

2011年の大学教育設置基準改正によりキャリア教育体制の構築が義務化されて以降、教育課程内外においてキャリア教育関連の取組みが幅広く展開されるようになった。中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）では「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」のことをキャリア教育と定義した上で、「特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践される」ことを強調し、日本キャリア教育学会「日本キャリア教育学会40周年記念ミッション・ステートメント」（2018）においても、キャリア教育の目的を「個人が生活し、学び、働く際の選択や意思決定および適応の支援を行うこと」と定めている。

キャリア教育は総合的な支援が前提ではあるものの、教育課程内での実践に焦点化した場合、キャリア教育科目は抽象的な教育目標・内容が設定されやすく、他科目との関係性も不明瞭で、効果検証も十分ではないといった課題が挙げられている[1][2][3][4]。実際、キャリア教育の裁量は各大

学委ねられていることから、授業目的（到達目標）や方法、学習評価のあり方、カリキュラム上の位置付け自体が多様な現状にある。

このような状況下では、キャリア教育の効果を検証する以前に、各大学においてどのような“文脈”でキャリア教育が展開されているのかを明らかにすることが重要である。具体的には、社会・地域のニーズや受講生の特徴等をいかに把握し、それらに応じた教育課程をどう設計・改善し、既述のキャリア教育の目的を達成しようとしているのかを詳らかにすることである。

### 1.2 目的

鈴木ら（2025）は大規模総合私立大学で実施される初年次キャリア教育科目の受講生を対象に大学への適応認識の傾向を複数年度に渡り分析し、その認識傾向に年度で違いがないことを明らかにしている[5]。受講生の特性が毎年度ある程度共通することを前提にした際、授業改善の手立ては実施済みの授業を分析することで得られやすくなる。授業としてのキャリア教育科目では、到達目標を設定し、その達成度合いを測るための学習評価方法を設ける必要があるが、他分野の授業と比較すると授業化することで生じる課題も少なくない。特に、学習評価に関する分析は、先に挙げたキャリア教育の定義や目的に鑑みると実態に応じて検

討の余地があるといえよう。

そこで本研究では、大規模総合私立大学において実施されるキャリア教育科目に焦点を当て、受講生の学習成果物を分析対象にテキスト分析を用いて学習評価の傾向を明らかにする。

## 2 方法

### 2.1 分析授業概要

「福大生のためのキャリアデザイン」(以降「福キャリ」略)は初年次学生のみを対象に開講される2単位の大規模講義授業で、300名程度の受講生は多様な学部で構成される。担当教員は所属の異なる3名で、時にゲスト講師(教職員や先輩学生)を交えながら、「大学生になる」とはどういうことかを授業目的の中核に、「福岡大学生になる」とことと「キャリアをデザインする」ことを学習・生活・アイデンティティの3つの側面から検討する授業である。授業前半に前回授業課題(リフレクション)のフィードバックを行い、その後に新しい学習内容に関する講義を行うという授業形式である。

成績評価は次に挙げる6つの到達目標を基準としてレポート課題2回と毎回の授業課題で行う。①大学における学習・生活を有意義に送るための基礎的な知識・方法を理解し、それを自身の経験や関心と関連させて説明することができる(知識・理解)、②大学生としての学びの成果を「適切に表現する」ための基礎的な知識を理解し、Microsoft forms やレポート等において活用できる(知識・理解)、③福大生として得ることができる知識・スキルの契機と種類を理解し、それらを自己のキャリアデザインと結びつけて説明することができる(知識・理解)、④様々な意見や考え方があることを踏まえて、自身の意見や質問をMicrosoft forms やレポート等で表現することができる(技能)、⑤大学卒業後のキャリア形成と大学生活を関連させて把握する観点を有し、自らのキャリア形成を主体的に考えることができる(技能)、⑥福大生としてのキャリアデザインの多様性を理解し、そのなかで自らのキャリアを積極的にデザインしようとする志向性を有する(態度・志向性)。

### 2.2 学習評価方法の課題

「福キャリ」の学習成果の集大成である最終レポート課題の内容は次の通りである。

「現時点であなた自身はどのような大学生になりたいと考えていますか。福キャリの授業で学

んだキャリアデザインに関する諸理論や、担当教員やゲスト講師によるエピソード・メッセージ等、あなた自身の考えを築くのに欠かせないポイントを必ず複数取り上げて1200字程度で論じてください。その際、テキストやまとめノートにアップされている授業資料(講義動画・講義スライド・参考URL・振り返りの記述等)を根拠資料として参考にしましょう。」

到達目標を基準に設定された本課題に対して、ルーブリックを用いて評価を行っている。具体的には、①主題:なりたい大学生像が書かれている、②課題理解:エビデンスに基づく欠かせないポイントを複数取り上げている、③文章の精度:他者に理解できるような粒度で書かれている、④形式:主に序論・本論・結論の形式要件を満たしているといった4観点を設けている。

これらの観点は受講生のキャリアに対する価値観を直接評価するものではなく、その表現方法や論理展開といった枠組みを主に評価する形となっているが、その設計自体がキャリア教育の目的に適っているかは判断が難しい。より評価の妥当性を高めるためには受講生がどのような価値を形成したのか、その価値自体に対しても一定の評価を示す必要があるが、特に複数教員で担当する場合、評価のための基準や観点の設定が決して簡単ではないという課題がある。

### 2.3 分析データ・方法

そこで、2025年度「福キャリ」における281の最終レポートを分析対象のデータとし、受講生の学習成果としてどのようなワードが取り上げられやすいのかを抽出する。最終レポートはMicrosoft forms で提出を求めたもので、授業でレクチャーしたレポート執筆方法に応じて、①タイトル、②序論、③本論、④結論、⑤参考文献の項目が設定されており、それぞれに対して受講生が記入する形式を用いている。

分析方法として、タイトル・序論・本論・結論それぞれにおいてワードクラウドで単語の出現頻度を可視化した上で、レポートの成績区別に使用される単語や単語同士の関係性の傾向を分析する。分析において必須の「ストップワード」には一般的な単語以外に、レポート課題文で表記されているワード等を含めた101ワードを登録した。あわせて「つなぐ単語」に関しても、授業で用いた専門用語を中心に20ワードを設定した。

### 3 結果

#### 3.1 全体傾向

全テキスト分析の結果として、「タイトル」中の頻出上位ワードは「大学生像、理想、大学生活、挑戦、目指す」であった。「序論」においては「授業、大学生活、行動、経験、挑戦、大学生像、社会」の順で用いられ、「結論」においても「大学生活、挑戦、行動、経験、社会」の順で使用頻度が高かった。同様のワードは「本論」中でもよく使用され、次点として「失敗、積極的、選択、自己、価値観」といったワードがあがった（図1）。

ワードの組み合わせとして、特に「本論」中では「計画的／偶発性、期待／役割、失敗／恐れ、学問／言葉、人／関わり、新しい／挑戦、行動／積極的、分析／自己、認識／自己、認識／社会」といったつながりが構成されやすかった。



図1 全体「本論」ワードクラウド

#### 3.2 最上位層の傾向

約1割に当たる成績最上位層の結果として、「タイトル」では「大学生像、挑戦、理想、大学生活、恐れ」があがり、「序論」においては「挑戦、授業、経験、社会、大学生像」、「結論」でも「挑戦、経験、社会、行動、成長」が頻出ワードとして並んだ。「本論」においても同様のワードが認められたが、特徴的な傾向としてゲストも含めた講師名がワードクラウド上で確認された。

「本論」中のワードの組み合わせは「期待／役割、偶発性／計画的、学問／言葉、応え／期待、新しい／挑戦、メンバー／社会」の順で多かった。

加えて、「ラーニングゾーン」や「コンフォートゾーン」といったテクニカルタームと頻出ワードとの結び付きが確認された（図2）。

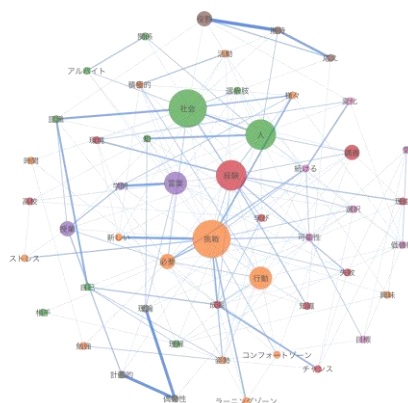


図2 成績最上位層「本論」ワードネットワーク

#### 3.3 上位層の傾向

約3割に当たる成績上位層の結果は、「タイトル」に「大学生像、理想、大学生活、目指す、挑戦」があがり、「序論」では「大学生活、挑戦、行動、授業、経験、大学生像、社会」の順で、「結論」において「大学生活、挑戦、経験、行動、成長、社会」があがった。「本論」も同様に「行動、経験、挑戦、授業、社会」が頻出だった。

「本論」におけるワードの組み合わせに関しては、「偶発性／計画的、恐れ／失敗、社会／人、関係／人間、分析／自己、認識／社会、行動／積極的、出会い／偶然」があがり、特に「経験」を軸に「社会、人」との「積極的」な関わりが示された（図3）。

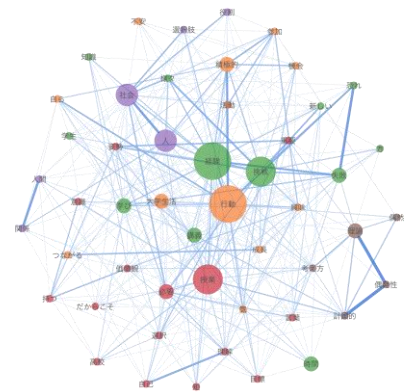


図3 成績上位層「本論」ワードネットワーク

### 3.4 中間層の傾向

約 4 割に当たる成績中間層の結果は、「タイトル」では「大学生像、理想、大学生活、目指す、キャリアデザイン」と続き、「序論」において「授業、大学生活、人、社会、大学生像、学び、経験」の並びとなった。「結論」では「大学生活、社会、経験、行動、挑戦」があがり、「本論」においては「人、経験、社会、授業、行動」の順であった。

「本論」におけるワードの組み合わせとして、「偶発性／計画、期待／役割、社会／人、学問／言葉、自己／認識」があがり、特徴として「アルバイト」への「参加」や「サークル」の「活動」を「積極的」に行う傾向が確認された（図 4）。

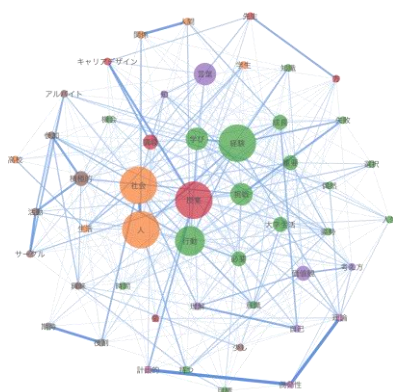


図 4 成績中間層「本論」ワードネットワーク

## 4 おわりに

### 4.1 考察

分析結果を受けて、「福キャリ」受講生の学習傾向と教員側の評価傾向について、授業実践の特徴を踏まえつつ考察する。

まず、成績区分と「序論」「本論」「結論」のカテゴリに関係なく頻出ワードがほぼ同一の結果となったことについて、授業におけるライティング支援の影響が少なからず影響していると考えられる。授業では中間レポート課題執筆前に「不特定多数の他者に伝えること」と「学習成果を適切に表現すること」をテーマに、大学でのライティングについて学習する機会を 2 回分設けている。そして、最終レポート課題執筆前に、代表的な中間レポートを用いて執筆傾向や改善点についてフィードバックする授業を 1 回設定している。この中で、レポート執筆のポイントとして繰り返し指導する点は「序論・本論・結論」の構成をはじめとした一定の型についてである。特に、フィード

バック回において「序論」と「結論」の内容に相違ないことがレポートの一貫性を担保するためには重要であることを強調している。中間レポート執筆時点では構成が崩れているケースが多く見られたものの、最終レポートでは厳選されたキーワードを用いてアウトラインが明確になったことで、ばらつきのない頻出ワードに集約されたと考えられる。

次に、「計画的偶発性理論」や「積極的な挑戦・行動で経験を積むこと」が今回抽出されたレポート内容の特徴であることについて検討する。昨今のキャリア発達理論として①偶発理論、②構築理論、③文脈理論が主流とされている中で[6]、「福キャリ」授業では①と②のインパクトが強く、受講生が認識可能な学習成果になりやすい傾向が示された。③の内容についてもテキストや授業で触れているが[7]、レポートで確認されるワードにはあがっていない。背景には、先輩学生をはじめとしたゲスト講師によるキャリアエピソードが①や②との親和性が高く、それまでの講義で紹介した知識や理論を受講生が先輩学生のエピソードを通じて再解釈しやすかった影響があると考えられる。

最後に、最終レポートにおける頻出ワードがほぼ同一である中、成績に差が生じた最大の要因として考えられるのは、課題文への適応度合いであろう。「本論」のワードネットワークの結果から明らかのように、中核となるワードこそ成績区分で大差はないが、その周辺の領域に確認できるワードとそれらの関係性については違いが見られる。成績最上位層の特徴は「計画的偶発性」以外のキャリア学習に関わる専門用語があがり、さらにワードクラウド上に複数の講師名もあがっていること、かつそれらを用いて核となるワードを説明していることから、課題文における執筆条件を満たしていることが確認できる。対して、成績上位層や中間層においては多様な専門用語を使いこなせていない状況が見取れる。上位層では抽象的なワード使用によりがちで、中間層はアルバイトやサークルといった身近な経験・機会と結びつけて表現する傾向があり、両者ともに学習した知識や理論をレポートでの主張の裏付けに活かせていないと考えられる。

### 4.2 結論と課題

本研究では、キャリア教育授業の学習評価方法のひとつであるレポートの内容について、ワードクラウドとワードネットワークの手法を用いて分

析を行った。その結果、受講生がレポートで用いるキーワードには極めて高い共通性が認められ、成績区分別の分析結果においても主要な頻出ワードに目立った違いはなかった。一方、ワードネットワーク上では主要ワードの周辺領域ワードにおいて顕著な違いが確認され、これら周辺領域ワードに見られる特徴が成績に影響していることが示唆された。

研究上の今後の課題として、中間レポートの分析の必要性がより高まった点があげられる。最終レポートの分析結果と比較することで、受講生のキャリア学習の成果とそれが半年の授業の中でどのように変化するのかを検討することができる。さらに経年分析を組み合わせることで、より大学の文脈に応じたキャリア教育研究を進めることが可能になろう。実践上の課題としては、本研究から得られた知見を授業改善へと活かすための手立てを具体的に検討する必要がある。学習評価方法の最適化に向けては、到達目標や評価基準の見直しというマクロレベルの改善から、授業内容の変更やレポート課題文の見直しというミクロレベルの改善まで広く検討しなくてはならない。

## 謝辞

本研究は福岡大学令和 6 年度領域別重点研究 (GR2401) の助成を受けたものである。

## 参考文献

- [1] 本田由紀、大学でキャリア教育が可能なのか、IDE 6 卷、36-41 ページ、2010.
- [2] 金子元久、キャリア教育—小道具と本筋—、IDE 6 卷、4-9 ページ、2010.
- [3] 大江淳良、“キャリア〇〇”の氾濫と混乱、IDE 6 卷、31-36 ページ、2010.
- [4] 谷田川ルミ、戦後日本の大学におけるキャリア支援の歴史的展開、名古屋大学高等教育研究 12 号、155-174 ページ、2012
- [5] 鈴木学・植上一希・藤野真、キャリア教育科目を履修する初年次学生の適応に関する意識変容分析、福岡大学教育開発支援機構紀要 7 号、2-16 ページ、2025.
- [6] 下村英雄、最近のキャリア発達理論の動向からみた「決める」について、キャリア教育研究 26 卷 1 号、31-44 ページ、2008.
- [7] 鈴木学・植上一希・藤野真、大学生になるってどういうこと？ [第 2 版] —学習・生活・アイデンティティ—、大月書店.